

# 幼児期における 自然体験活動の展開と 効果に関する研究

National Institution For Youth Education

平成30年度  
調査研究  
事業



## 中部・北陸ブロック次長プロジェクト

-  国立若狭湾青少年自然の家    国立妙高青少年自然の家    国立乗鞍青少年交流の家  
 国立能登青少年交流の家    国立立山青少年自然の家



National Institution For Youth Education  
独立行政法人 国立青少年教育振興機構

## 幼児期における自然体験活動の意義

「知ることは感じることの半分も重要ではない」

幼児期は、知識や技能を一方向的に教えられて身につく時期ではなく、豊かな環境の中で、やりたい気持ちや自分の興味に基づいた直接的・具体的な体験を通して、感性を育む時期です。周囲に存在するあらゆる環境からの刺激を受け止め、自分から興味を持って環境に関わることによって様々な活動を展開し、充実感や満足感を味わうことが重要です。

自然の中にはこの環境が充分にあります。多様な自然環境は子供たちに様々な気づきをもたらしてくれます。まさに「センス・オブ・ワンダー」の世界です。

中部・北陸ブロックでは、立地を活かして海や沢、森、雪などの自然の中で、子供たちのこころとからだに残る自然体験活動の創造に挑戦しています。



幼児期における自然体験活動の展開と効果に関する研究

目次

- 幼児期に育みたい「3つの柱」・「10の姿」と幼小接続……………3
- プログラムのポイント
  - 国立若狭湾青少年自然の家「わかさわん うみはともだち」…5
  - 国立妙高青少年自然の家「幼児キャンプ2018  
～やってみよう妙高！～」……………9
  - 国立乗鞍青少年交流の家「わくわく！のり森ランド  
～家族の絆プロジェクト～」……………13
  - 国立能登青少年交流の家「小さいっしょに！のとまり会」……………17
  - 国立立山青少年自然の家「やんちゃキッズの大冒険 夏!!」…21
- 事業を終えて……………25
- 調査研究事業の概要……………26

# ～「生きる力」につながる～

## 確かな学力

基礎・基本を確実に身に付け、  
いかに社会が変化しようと、  
自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え  
主体的に判断し、行動し、  
よりよく問題を解決する  
資質や能力

# 生きる力

## 豊かな人間性

自らを律しつつ、他人とともに協調し、  
他人を思いやる心や  
感動する心などの豊かな人間性

## 健康・体力

たくましく生きるための  
健康や体力

知識・技能

思考力・判断力・表現力等

学びに向かう力・人間性等

### 知識・技能の基礎

- ・ 基本的な生活習慣や生活に必要な技能の獲得
- ・ 身体感覚の育成
- ・ 様々な気づき、発見の喜び 等

## 遊びを通しての総合的な指導

### 思考力・判断力・表現力等の基礎

- ・ 試行錯誤、工夫
- ・ 他の幼児の考えなどに触れ、新しい考えを生み出す喜びや楽しさ
- ・ 言葉による表現、伝え合い
- ・ 自分なりの表現 等

### 学びに向かう力・人間性等

- ・ 思いやり ・ 自信 ・ 好奇心、探究心
- ・ 話し合い、目的の共有、協力
- ・ 色・形・音等の美しさや面白さに対する感覚 等

小学校以上

幼児教育・保育

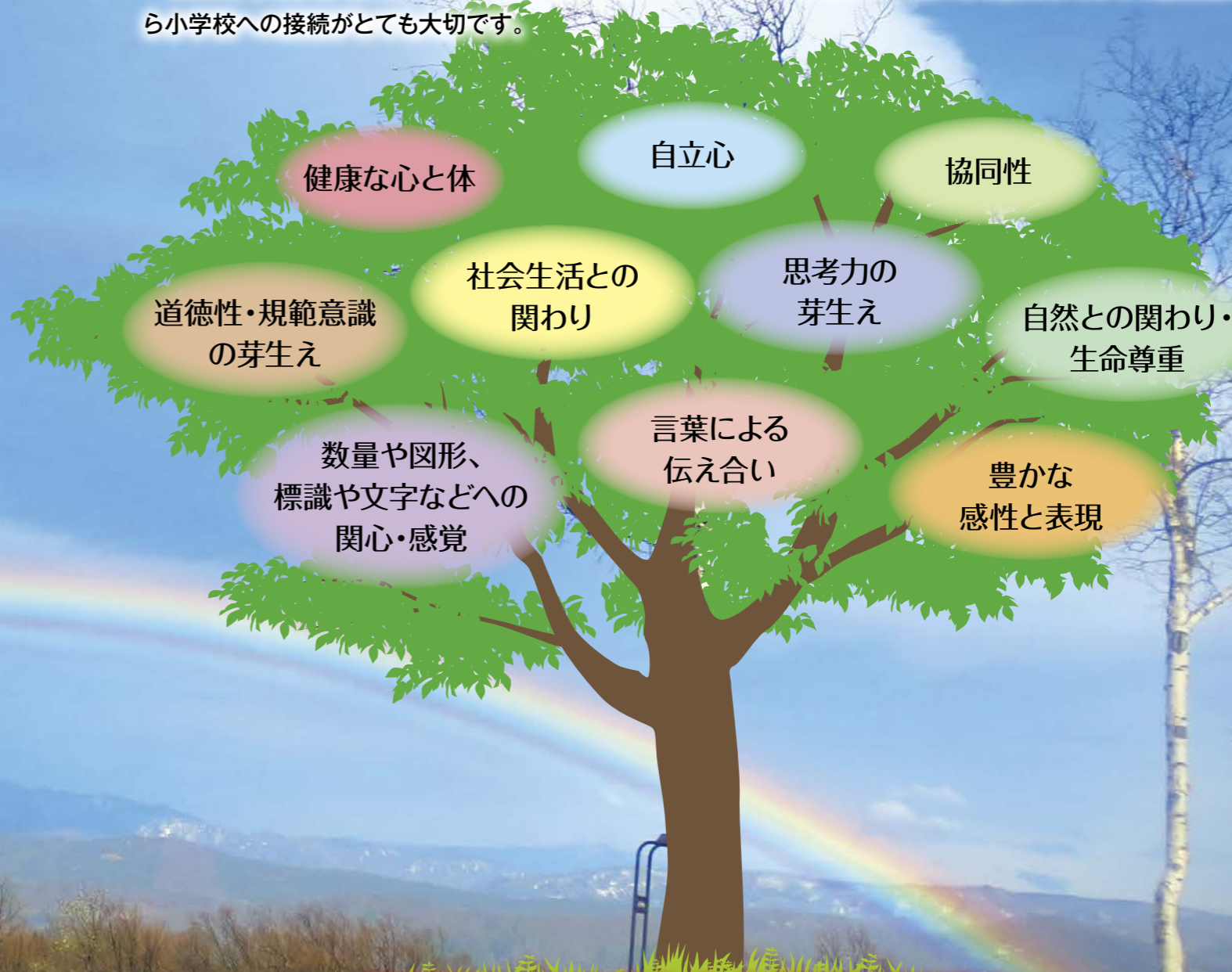
## 幼児教育・保育において育みたい「資質・能力」の「3つの柱」

幼稚園教育要領等(平成29年告示)で、幼児教育において育みたい「資質・能力」の柱として3つの要素が掲げられました。

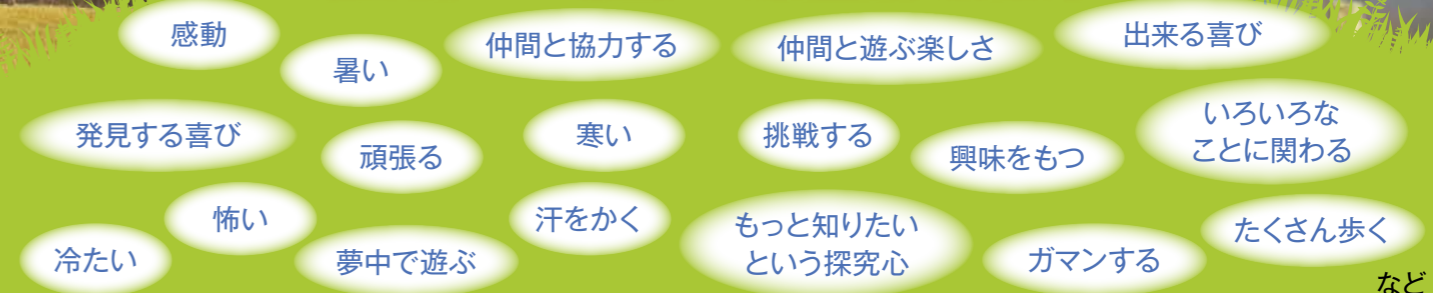
## 幼児期の終わりまでに育ってほしい「10の姿」

「資質・能力」を具体的に育てようとするときの注意点として表されたものが、「幼児期の終わりまでに育ってほしい「10の姿」」です。これは、幼児期に完成を目指すということではなく、子供たちが歩み出している方向を表しています。

また、小学校入学後の指導に継続させていくことが小学校の学習指導要領にも明記されており、幼児期から小学校への接続がとても大切です。



## — 幼児期にこそ豊かな自然体験活動を —



# わかさわん うみはともだち

## 1 事業の紹介

国立若狭湾青少年自然の家では、近隣の3つ市町とそれぞれ異なるアプローチから連携し、それらの市町の全園の年長児が参加する幼児期の海の体験活動を実施している。

<小浜市> 若狭地域の自然や歴史、文化を生かした体験活動を推進する取り組みを行っている。その一環として、小浜市の公立、私立の保育園、幼稚園、認定こども園等、全13園を対象とした「わかさわん うみはともだち」を実施している。海の体験に加え、山での体験、各園の地域での自然体験と年間3回の事業を行っている。

<若狭町> 若狭町の公立、私立全9園を対象に、海の体験活動も取り入れた事業を実施している。若狭町では、地域の豊かな自然を積極的に保育に取り入れているが、普段の保育の中に、若狭地方の自然の特色でもある海も加えてもらいたいと考えている。

<高浜町> 若狭和田ビーチがあり、美しい海を生かした地域づくりを積極的に行っている。こうした取り組みを中心的に行っている若狭高浜観光協会、ブルーフラッグアカデミーと連携し、高浜町内保育所全4所の年長交流会として、若狭和田ビーチでの海の体験を実施している。機構本部と国立の海洋型施設6施設が連携して進めている低年齢期の海の体験活動を普及する「SEA プロジェクト」において、各施設の近隣保育園等と連携した事業を地域が主体となつて行う試みも進めており、このプロジェクトの一環として、小浜市の事業等も参考にしながら進めている。

たり寝そべったりと思いきいに海を楽しむ園児の姿が見られた。海の中では、ミズクラゲを見つけ、触ったり捕まえたりして遊ぶ園児が多かった。また20mぐらい沖にある飛び込み台まで行き、そこから飛び込む園児もたくさんいた。タイドプールでは、貝やヤドカリやカニやイカや小魚などのたくさんの生き物を箱メガネでのぞきながら捕まえたり、観察したりすることができた。水槽も持っていったので上からと横から、それらの生物をじっくりと観察することができた。初めて見る生き物も多くて、子どもたちは興味深く観察活動を行っていた。その後、「海での活動中の子どもたちの様子」と「海での活動後、園での活動の変化」について先生方にアンケートを実施した。

### <若狭町>

	9:00	10:00		14:00		
各 回 同 日 程	園 出 発	自 然 の 家 着	海 の 活 動 ・波遊び ・磯観察 ・砂浜遊び 等	【おにぎり】 昼 食	海 の 活 動 着 替 え 片 付 け	自 然 の 家 発 お わ り の 会 (各園へ)

8月20日・21日に若狭町内の全園の年長児を日帰り団体として受け入れ、運動遊びの視点を加えた海を中心とした自然体験を行った。2日間で園児133名と職員24名の参加があった。安全への配慮から指導者・園児の全員がライフジャケットをつけて砂浜や海やタイドプールで活動を行った。昼食は、注文したおにぎり2個で、各園に都合のよいタイミングで食べることができたので、自由に活動の時間配分を決めることができた。若狭町の先生方にも小浜市の先生方に行った同じアンケートを行った。



### <高浜町>

	10:00		11:10	
は じ め の 会	・ビーチクリーン (10分) ・遊水 (1回目・20分) ・水分補給・休憩 (5分) ・遊水 (2回目・20分)	お わ り の 会	シャワー 着 替 え	

7月3日に高浜町内の全園の年長児を高浜町の若狭和田ビーチで、下記の3つのことを目標として、地域の海を感じて楽しみ、海辺の環境を生かした子育てにつなげていく活動を行った。

- 目標①「普段できない活動を通して新しい刺激を得ることで、子どもたちの更なる心身を発達させる。」
- 目標②「高浜町の象徴でもある海における活動を通して身近に感じてもらうことで、地元への一層の理解を深める。」
- 目標③「本企画の内容をフィードバックし、高浜町内における海辺の教育活動の質の向上と活性化につなげていく。」

当日は、園児89名と保育士12名が参加した。活動内容は、ビーチクリーン(ゴミ拾い)10分間→遊泳20分間→水分補給と休憩5分間→遊泳20分間という形で行った。ビーチクリーンでは、どのようなゴミがあるのかを知ってもらい砂浜を綺麗にする必要性や砂浜の管理の大変さを感じてもらえた。遊泳の活動は、遊泳エリアをブイで囲み、そのエリア内でライフジャケットをつけて自由に遊んでもらった。遊泳エリアは、奥行き25m・横幅50mの広さであった。水中では園児5名に大人のスタッフ1名が付けるような体制(水中19名、陸上待機11名)で行った。

本事業の効果測定のために保護者向けアンケートと保育者向けアンケートを実施し、園児に海を題材にした絵を活動前後に描いてもらった。描いた絵の展示を各地区の公民館で行い、保護者や地域住民に広く観覧してもらい簡易な感想を記入してもらうことも検討している。



## 2 主な活動プログラム

### <小浜市>

	9:00頃	10:00		12:50		14:00	14:30
各 回 同 日 程	園 出 発	自 然 の 家 着	は じ め の 会 ・磯遊び ・砂浜遊び	昼 食	【食 堂】	休 憩	お わ り の 会 (各園へ) 自 然 の 家 発

	9:00頃	10:00		12:00		13:00	14:30
各 回 同 日 程	園 出 発	自 然 の 家 着	は じ め の 会 ・磯遊び ・砂浜遊び	昼 食	【持 参 弁 当】	・磯遊び ・砂浜遊び	お わ り の 会 (各園へ) 自 然 の 家 発

8月28日・29日・9月7日、小浜市内の保育園・幼稚園・子ども園を数ブロックに分け、100人程度の日帰り団体として受け入れ、砂浜や海やタイドプールでの活動をメインに体験活動を行った。安全の配慮から指導者・園児の全員がライフジャケットをつけて砂浜や海やタイドプールで活動を行った。活動内容や活動場所や活動時間も園ごとに決めて各園独自の活動ができるよう取り組んだ。3日間とも海の状況はちがったが、その状況に応じた活動を進めることができた。砂浜では、砂遊びをしたり波に流され



### 3 プログラムのポイント（プログラムの展開と効果）

#### <園児たちの自主性を大切に活動>

- ① 海や浜での遊び方については、園児たちがしたい遊びを自由に行った。
- ② 園児たちには、活動内容についての指示は行わなかった。
- ③ 園ごとに担当職員とボランティアをつけて、活動の支援を行った。

#### <海でライフジャケットを使った活動の展開>

- ④ 海に入る前に先生方やスタッフが協力して、ライフジャケットを全員に着せる。
- ⑤ ライフジャケットを着ていると体が浮いて沈まないことを海の浅い場所で確かめる。
- ⑥ 決められた海の範囲を自由に泳いだり、砂浜で遊んだりする。
- ⑦ 浮きながら、箱メガネで海の中をのぞく。
- ⑧ 飛び込み台などを目標にして、深い海でも怖がらないで泳いでいく。
- ⑨ 飛び込み台によじのぼり、飛び込み台から飛び込む。

#### <活動の効果> 保育士さんへのアンケート結果

- ・深いところは、怖さもあったようだが、勇気を出して挑戦してみようとする幼児が沢山いた。
- ・普段は保育士とは、距離をおいて関わっている子が普段のより気さくな感じで会話をし、楽しい発見をすぐに保育士や近くにいる友達に伝えていた。
- ・怖がりの子もライフジャケットを身に着けている安心感から楽しんで徐々に海に入れていた。
- ・活動中は、自然と声が大きくなり、生き生きとした表情が見られた。
- ・飛び込み台まで行き、飛び込み台から飛び込んだことで、達成感や満足感を感じていた。
- ・ライフジャケットをつけることで海に対する恐怖心が取れ安心して海を楽しむことができた。
- ・ライフジャケットの安心感が園児たちの活動範囲を広げ、普段はいけないうみの上を自由に泳げることができ、たくさんの新しい発見ができた。
- ・園児たちは、いつも以上に思い切った行動ができ、海を楽しめたことで、園児と海の距離が縮まった。
- ・プールでは、水に対して少し怖さがある子が、海ではとても表情が明るく楽しんでいた。怖さよりも、楽しさが勝っていた。

### 4 評価・考察

#### <評価手法>

「体験前の絵」と「体験後の絵」のそれぞれの傾向を明らかにすることを通して、全体としての絵の変化について触れ、体験前と体験後の絵には、どのような特色があるか、両方の絵がそろそろ 214 組の絵をそれぞれにいくつかのカテゴリーに分けて評価する。カテゴリー分けは、職員 15 名で相談しながら決めた。

#### 絵の分類

- ①海と生き物と人（人が海に入っている）
- ②海と生き物と人（人が海に入っていない）
- ③海と人
- ④海と生き物（浜辺） ⑤海と生き物（浜辺・景色） ⑥海と生き物（海の中） ⑦海と生き物（海と空）
- ⑧海と乗り物
- ⑨海のみ（景色） ⑩海のみ（海のみ） ⑪海のみ（浜辺）
- ⑫生き物のみ ⑬建物 ⑭人魚
- ⑮分類不可
- ⑯ライフジャケットを着た人や浮いている飛び込み台

#### 分類の結果

分類	体験前	体験後
① 海と生き物と人（人が海に入っている）	17（8%）	29（14%）
② 海と生き物と人（人が海に入っていない）	37（17%）	24（11%）
③ 海と人	16（8%）	31（14%）
④ ~ ⑦（海と生き物）	91（43%）	61（28%）
⑧ 海と乗り物	6（3%）	0（0%）
⑨ ~ ⑪（海のみ）	22（10%）	31（15%）
⑫ ~ ⑭（その他）	13（5%）	0（0%）
⑮ 分類不可	12（6%）	3（1%）
⑯ ライフジャケットや飛び込み台	0（0%）	35（17%）



① 海と生き物と人（人が海に入っている）



② 海と生き物と人（人が海に入っていない）



③ 海と人



⑯ ライフジャケットや飛び込み台

- ・①～③の海と生き物と人が含まれる絵の割合が多くなった。
- ・①と②から、人が海に入っている絵の割合が増え、人が海に入っていない絵の割合が減った。
- ・④～⑦（海と生き物）の分類の割合が減った。
- ・⑮分類不可の絵の割合がかなり減った。
- ・⑯ライフジャケットや飛び込み台が入った絵の割合が17%とかなり高かった。

#### まとめ



上の表の分類結果や分析にあるように、友達や先生方と海での体験の時間を十分取ったことで、海で生き物と人との楽しい活動を楽しめたことが、体験後の絵に「海と生き物と人の絵」が増えたことにつながったと思われる。

また、体験後の絵の中にライフジャケットを着た人や飛び込み台を描く園児の割合が多かったのは、ライフジャケットをつけることで、安心して海を楽しめたという印象が強く残ったからではないかと思われる。同じように飛び込み台を描く園児が多かったのは、浜から遠くにある飛び込み台まで自力で行けた喜びが心の中に鮮明に残っていたからではないかと思われる。

さらに、体験後に分類不可の絵の割合が減り、海の絵と認識できる絵の割合が体験前の88%から99%に高くなったのは、今回の海での体験を通じて海を具体的にイメージすることができるようになったからだと思われる。

# 幼児キャンプ2018 ~やってみよう妙高!~

## 1 事業「幼児キャンプ」について

### (1)概要

妙高青少年自然の家では幼児期における自然体験活動の機会として、2泊3日の幼児キャンプを年に数回実施してきている。幼児4～5人からなるグループに保育士、学生スタッフが入り、幼児たちをリードする形で活動している。保護者については一緒に行動するもの、見守る立場での参加をお願いしている。

実施日 平成30年8月17日～19日

参加者 幼児20人を4つのグループに分けて活動する

(保護者および兄弟姉妹など、他に39人が一緒に活動した。)

### (2)ねらい

IQや学力、技能といった認知的能力の発達についてだけでなく、根気強さや好奇心、自己抑制、協調性といった非認知的能力においても、教育要領をはじめ多くの場で幼児期の教育の重要性について語られ始めている。日常の遊びや生活の中でどんな体験を積んできたか、幼児教育の段階でこれらの力を身につける機会を得てきたかどうかなど、幼児教育は人格形成の基礎を培う大切なものとさえ言われるようになってきている。

幼児キャンプ実施に当たっては、幼稚園教育要領にある育みたい資質・能力を示した3つの柱「知識及び技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」や保幼小接続を円滑にするための方向性を示した「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」など、幼児教育の指針を加味した活動プログラムを展開していく必要がある。

今年度の幼児キャンプは「物事に挑戦しようとする力」をテーマに“やってみよう妙高!”を合言葉に活動を展開していく。2泊3日のキャンプには、やりたかったことはもちろん、やったことがないことや苦手なこと、普段は保護者にやってもらっていることなどに挑戦する場がたくさんある。これらの挑戦を自分で、そして家族や仲間と力を合わせて「やってみる」絶好の機会としたい。そして「やってみたら、楽しかった」と感じるができるキャンプとなるよう、願いをもって企画・運営を進めた。

やってみよう!

**挑戦**

できた

失敗

**楽しかった!**

**達成感 向上心 好奇心 広がり 夢中 粘り強さ  
勇気 協力 試行錯誤 体をうまく操る力 など**

## 2 活動内容

月	日	曜	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
8	17	金												17:15 開会式	17:45 夕食	18:45 入浴	20:00～ 20:40 仲良しタイム	21:30 就寝	
8	18	土	6:30 起床	7:00 朝のつどい 7:15 朝食		9:00～10:20 森遊び		10:50～13:50 野外炊事		14:00～15:30 森の探検 (保護者はテント設置)		16:20 入浴		17:15 夕食	18:50～19:35 キャンプファイヤー 19:40～20:10 ナイトハイク		21:00 就寝(テント泊) 21:00～ 22:00 子育てカフェ		
8	19	日	6:30 起床	7:05 朝食	～9:15 テントの撤収	9:20～11:10 源流探検		11:50～ 12:15 振り返り 12:15～ 12:25 閉会式											

## 3 自然体験活動プログラムの展開

自然体験活動を経験させたいということから活動内容は例年大きく変わらないが、「どんな力を身につけさせたいのか」というテーマは年度により様々である。そのため、自然体験活動プログラムの展開の仕方は多少変化する。

前述の通り、今年度のキャンプタイトルは“やってみよう妙高!”である。初めてのことや苦手なこと、危なっかしいことであっても、何だかやってみる。そして「やったらできた」という経験をたくさん積むことができるプログラム展開となるよう、場の設定や幼児との意図的な関わり方などを工夫した。

### ○森遊び 森の中で遊ぼう!

最初の自然体験活動。幼児の興味や意欲に共感しながら、見守っていく。「木に立てた」「登れた」「ぶら下がれた」という経験をさせたい。また、1人の発見を仲間にも広めるなど、仲間との関わりを増やす場をしたい。



### ○野外炊事(焼きそば作り) グループ5人で家族分(大人16人前)の焼きそばを作ろう!

「切る」「ちぎる」「洗う」「炒める」「盛り付ける」を分担するのではなく、すべての作業に全員が挑戦する場をつくる。片付けは、自分の家族のお皿やはしなどを「洗う」「拭く」。

※火起こしや、鉄板、包丁などの洗浄は大人(保護者)が行う。



### ○森の探検(オリエンテーリング) 家族の待つテントに向かってGO!

このキャンプで初めて家族と離れて行う活動。

ゴールまでを5区間に分け、1区間ずつ隊長となって、森の中を探検していく。

崖をのぼり、沢を渡り、茂みを突き進んで行く。分かれ道が来たら、地図を頼りにみんなで相談する。



○源流探検 ゴールの土管を目指して源流を探検しよう！

水の冷たさや道の険しさに慣れてきたら、大人の手を離れ、自分たちの手足を駆使して前に進ませていく。仲間と声をかけ、相談しながら、岩場や滝、枝や茂みをクリアしていく姿を期待したい。



4 評価・考察

(キャンプ実施後の保護者アンケートから)

- ・仲間がやっているのを見たり、励まされたりしながら、いろいろなことにチャレンジしていました。苦手だった虫を捕まえることもできました。
- ・野外炊事では一人ひとりがチャレンジする場があり「自分も貢献した！」という気持ちが高まっていました。
- ・森の探検が特に達成感があつたようです。「保護者なしで」というのがよかったようです。
- ・森の探検は親から離れて、地図を持ち、とても楽しそうでした。帰ってきたときの顔や姿に感動しました。
- ・源流探検では水が冷たくて最初、泣いていた息子も慣れてくるにつれて、スタスタと文句も言わずに登っていたのが印象的でした。こういう経験が必要なんだと改めて感じました。



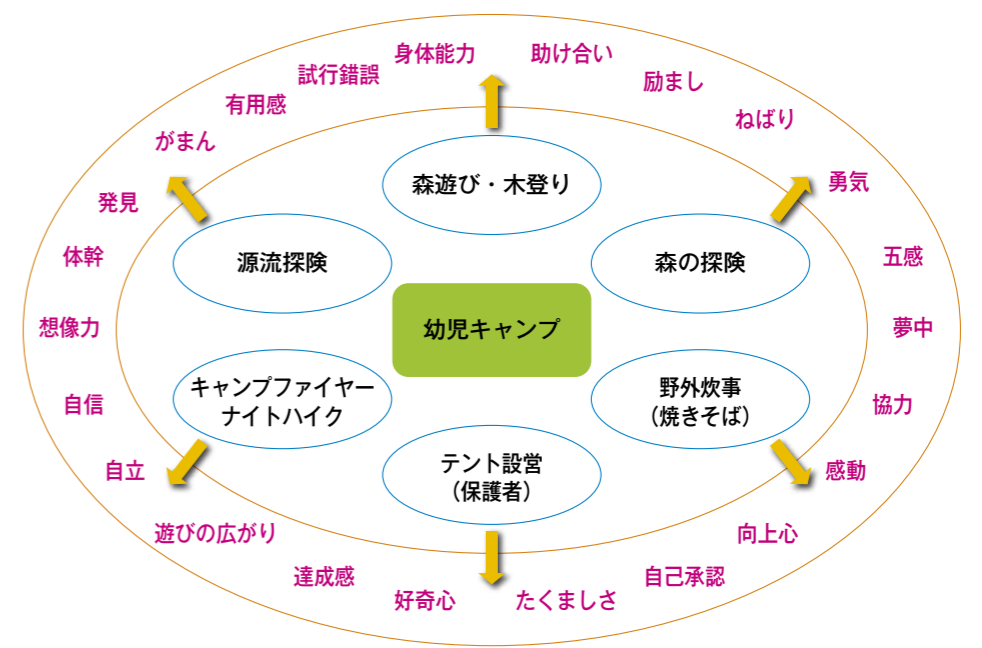
- ・人見知りの娘が、たくさんのお友達と楽しんでいたことが見れてうれしかったです。
- ・「できない。ママやって。」が口癖なのに、自分から取り組んでいる姿に感動とたくましさを感じました。
- ・一人っ子で自分、自分と優先する子でしたが、源流探検では仲間と一緒にゴールしたいと声を掛け合い、お友達を待つなど、成長を間近で見られてよかったです。
- ・いつも甘えてばかりの息子が、周りに励まされ一人で寝たり、先頭を歩いたり、いつも見られなかった姿を見ることができてうれしかったです。
- ・工夫されたプログラムで、感謝しています。ここでの経験は子供たちの血肉となり、力強く育つ力になってくれると思っています。
- ・最終日まで、疲れてしんどくなる子がいなかったのがすごい。達成感がどれだけ大事かを改めて感じました。



(考察)

“やってみよう妙高！”を合言葉に家族や仲間と力を合わせて挑戦した幼児キャンプ。自然体験活動が、普段とはちがった姿や、日を追うごとに変容していく様子を見せるなど、大きな有効性を感じることができた。

※図はスタッフや保護者が挙げた有効性をまとめたもの



まとめ



不規則に湾曲し、しなる木に登ったり、ぶら下がったりすることや、茂みや倒木、急斜面といった足場が不安定な森道を歩き進む経験は、近所の公園や道路ではできない。ましてや、ずぶ濡れになりながら、岩を越え、小滝を登ることなど日常ではなかなかないことである。自然の中での活動はイレギュラーなコンディションだったり、非日常的だったりする分、難易度やリスクが高くなってしまうが、それを体験した子どもたちの表情はとても生き生きとしている。程よい難易度だからこそ、挑戦心や勇気、根気強さ、協力、達成感や一体感、自信といった内面から湧いてくる感情に心が満たされるからであろう。

幼児期の自然体験活動には、意欲や好奇心、自己抑制に自己肯定感、協調性などといった人格形成上の土台を築く上での有効性を感じることができる。今後も一層の推進・啓発を進めていきたいと思う。

# わくわく！のり森ランド ～家族の絆プロジェクト～

## 1 事業の紹介

教育事業「わくわく！のり森ランド～家族の絆プロジェクト～」は、平成25年度からスタートして6年目となる。本事業は、未就学児（幼稚園児・保育園児）とその家族が、五感を使って乗鞍の自然をからだ全体で味わい、自然体験活動を生かして子育てについて考えるとともに、幼児の健全な育成を促すことを目的としている。

1泊2日の日程で、季節ごとに異なる自然に触れ合えるよう、5月には第1回「新緑の森」、7月には第2回「初夏の森」、そして10月には第3回「秋の森」と年間3回実施している。

今年度は、7月の第2回「初夏の森」が大雨の影響で実施できず、急遽プログラムを変更し、10月上旬に「森で遊ぼう」として実施することとなった。

全3回とも、基本プログラムは同じ流れで行っている。

1日目はアイスブレイクで打ち解けた後、森の散歩やビンゴなどの活動をしながら自然に触れていく。

夜は親と子でそれぞれ別のプログラム（子供たちは「読み聞かせ」、保護者は「子育て座談会」）を行う。親は、同じ年代の子をもつ者同士で、日頃の思いや悩みを話し合うことで、子育てについて立ち止まり振り返る場とする。子供たちは、みんなで絵本や紙芝居などの読み聞かせを楽しむ。その後は、外で星を眺めたり、普段はなかなか体験できない真っ暗な森を歩いてみたりする活動を行う。

2日目は、調理や火おこし体験など、1日目とは異なる活動を通して自然と触れ合っていく。

本事業は、初めて参加する家族もいれば、何度も参加しているリピーター家族もいる。リピーター家族の中には、「前は『初夏の森』に参加したので、次は別の季節で参加したい」という家族や、「1回目参加してとても楽しかったので2回目も」という家族など様々であるが、家族で自然体験をして過ごすことに喜び・意義を見出していることがうかがえる。



## 2 主な活動プログラム

### 基本プログラム

#### 【1日目】

	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
子	受付	開校式	アイスブレイク	昼食	季節ごとの大自然を親子で楽しもう①	☆親子の時間☆ (自由時間)	☆親子の時間☆ (自由時間)	☆親子の時間☆ (自由時間)	読み聞かせ	夜の乗鞍を楽しもう (自由参加)	☆親子の時間☆ (自由時間)	☆親子の時間☆ (自由時間)	☆親子の時間☆ (自由時間)
親						夕べのつどい 17:00～	食事 17:20～18:30	入浴 16:00～22:00	子育て座談会				

#### 【2日目】

	6:30	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00
子	起床	朝のつどい			季節ごとの大自然を親子で楽しもう②		昼食	親子でふりかえり	閉校式	解散
親	起床	朝のつどい	清掃	朝食 7:40～9:00						

※季節によって、活動の内容は異なる。活動内容は、依頼した主任講師と打ち合わせて計画していく。

※自由時間を設けたり、夜の活動も自由参加にしたりするなど、それぞれの家族の実態に合わせて無理なく活動に参加できるように配慮する。

※子育て座談会には、外部講師を依頼する。(元小学校教諭、元学校長など)

## 3 プログラムのポイント

### (1) 親子で五感を使って楽しめる活動

親子でともに楽しむことができるよう、主任講師と打ち合わせをしながら、いろいろな活動を準備した。そうすることで、いろいろな角度から五感を使って自然に親しむことができ、幼児も飽きることなく楽しめる。また、様々な提案をすることにより、各家庭に戻ってからも、自然体験活動に取り組んでもらうことができた。

#### <プログラム例>

森の散歩や森のビンゴ、葉っぱを使ったクラフト、葉っぱのプールや葉っぱの布団体験、ハンモック体験、たき火体験、調理など



### (2) 学生ボランティアのサポート



1家族に1人学生ボランティアがつき、家族の活動をサポートする。ボランティアの学生が入ることで、子供たちは親だけに頼るのではなく、お兄さんお姉さんと一緒に遊んだり、サポートしてもらったりしながら自分でやってみようとするこも増えたりする。保護者も、そんな子供たちの様子を一步離れて見守ることができる。

サポートするにあたっては、主任講師を交えて活動前に事前打ち合わせを行い、どこまで子供たちに任せ、どんな手助けをするかなどについて共通理解を図ってから活動に臨んだ。

### (3) 交流の場である子育て座談会

1日目の夜には、子供たちが「読み聞かせ」を楽しむ間、親と講師による「子育て座談会」を実施する。一日同じ体験活動をした親同士で語ることで、日頃の子育てについての思いや、子供について抱いている願いなど、普段の幼・保育園での保護者会とは違う雰囲気の中で気兼ねなく話ができる。また、園の保護者会と異なり、お父さんの参加も多いため、父親としての立場での思いも語り合うことができる。

元教員・元小学校の校長など、教育の専門家に座談会の講師を依頼して行った。

#### <座談会のテーマ例>

- ・子供たちの名前に込めた願い
- ・子供たちに伝えたい遊び
- ・わが子に味わわせたい自然体験活動
- ・「家族で登山中に天候急変！あなたならどうする？」
- ・「子育ては素晴らしい」と思ったこと
- ・親になって変わったこと
- ・「こんな親になりたい」

#### <方法>

上記のようなテーマについて、小グループで語り合う。まとめることはしない。



## 4 評価・考察

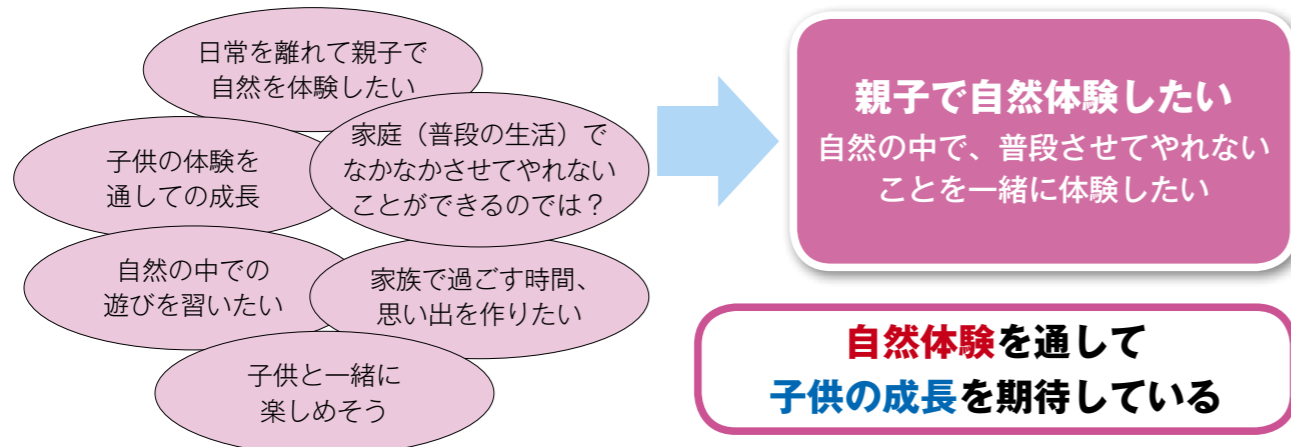
### 参加保護者対象の調査

今回、第2回と第3回の参加者（保護者）に対し、これまでの利用者事業アンケートだけでなく、「のり森ランド」へ期待していたことや、どんな点が参加してよかったと思う点なのか、などを尋ねて、「のり森ランド」が子育てに対して果たしている役割、求められる内容などについて探ろうと試みた。



## 保護者へのアンケート結果から

### ◆のり森ランドへの参加理由（期待していたこと）◆



### ◆この事業を通しての変化◆

#### 親の変化

もっと子供の良い所を見て、たくさんほめてあげようと思うようになった

子供たちが普段から我慢していることがあるのだとわかった

子供の楽しむ姿をもっと見たいと思うようになった

子供は子供たちの集団の中にいることが好きなのだということがわかった

日常から離れて子供と接したら、かわいところいっぱいなのだ気づかされた毎日追われているとよい所を見逃しているのだと思った

**子供に対する気づき  
親としての思いの変化**



### 子供の变化



人前で話すことになれてくれた

一人でできることが増えた

親と別行動することができた

いつも以上に自然の中での活動が楽しめていた

食事をよく食べるようになった  
(皆と一緒に楽しかった様子)

初対面の人とも自然に仲良くなれた

自然の中に積極的に入って遊べるようになった

**仲間と一緒に楽しむ  
自信がつく**

これらのアンケートの回答から見てくることをまとめると、保護者は「親子で一緒に自然体験を楽しみたい」「自然体験を通して成長してほしい」という願いをもって参加し、この事業を通しての自然体験に自分自身も満足している。

ここで体験したことが、「家でもやってみよう」「これならできそう」という、これからも自然に触れ合っていこうという意欲につながっていることもうかがえる。また、座談会で語り合ったことや講師の言葉で、保護者の考え方が（前向きに）変わったり、気持ちが楽になったりしたという感想があり、子供たちだけでなく保護者にとってもよい変化が見られるキャンプとなった。

#### まとめ



#### <親子で楽しめる活動に関わって>

第1回「新緑の森」、第2回「森で遊ぼう」、第3回「秋の森」と、それぞれ親子一緒に季節を味わう活動を取り入れた。アンケート結果から「楽しみ方を知った」「楽しめた」と感じている家族が多く、「これなら今度自分達でもできそう」というヒントとなる活動と、逆に「参加したからこそ楽しめる」という活動をバランスよく取り入れることが、「参加してよかった」「また体験したい」という満足感につながっていた。この満足感が、家庭に戻っても自然に親しむ活動をしているという意識につながると考える。

#### <学生ボランティアのサポートに関わって>

学生ボランティアのサポートによって、家族の活動が充実したものになったり、子供たちが親から離れて活動できたりした。子供たちにとっても、家族ではない「お兄さんお姉さん」と触れ合う体験が楽しかった思い出となり、「お父さんお母さんに手伝ってもらわなくてもできた！」という満足感を味わうことにつながっていた。保護者の側からも、一歩離れて子供の活動を見守ることができ、我が子の新たな一面を発見する助けとなっていた。しかし、学生ボランティアによって関わり方に差があったり、家族の中でも要望に差が見られたりするため、今後は、事前の打ち合わせをさらに密にし、事業の狙いも含めてボランティア全員が共通理解して進める必要がある。

#### <交流の場である子育て座談会の設定に関わって>

この事業で初めて出会った人達と子育てについて語り合うということは、一見やりづらそうに思えるが、同じ活動を楽しみながら親しくなって打ち解けた雰囲気があり、気楽に話ができる場となった。語り合うだけで、気持ちが楽になったり、仲間の話を聞いて考え方が変わったりするものである。アンケートの中にも、この座談会で子育てについての考え方が変わったという記述が見られた。自然体験をするだけでなく、一時子供たちと離れ、親だけの座談会を設けることは、この事業の中で大切な役目を果たすことであると感じた。

今後も講師と相談しながら、座談会の方法などをより良いものにしていく必要がある。

# 幼小いっしょに！のとまり会

## 1 事業の概要・目的

### (1) 概要

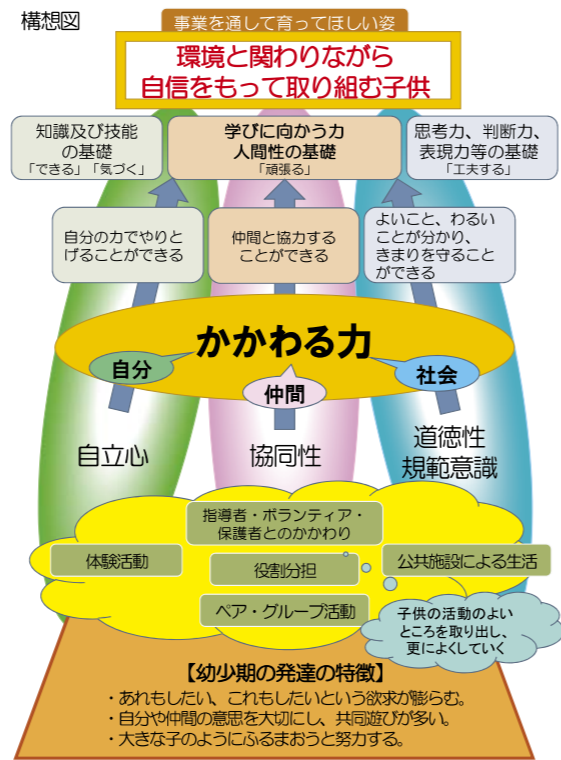
年長児と小学1・2年生が、親元を離れ、自分の力で活動する場を提供する。これにより、一人ひとりが自分なりの体験を積み上げていく機会をもつことができる。また、体験の幅を広げるとともに、自己肯定感を高めることができる。特に、年長児にとっては、普段と違う仲間の中で過ごすことにより、頑張りや我慢する機会をもつことができる。小学1・2年生にとっては、お兄さん、お姉さんという自覚をもたせ、「小1プロブレム」にも対応したい。

### (2) 目的

異年齢集団による生活体験活動をととして、低年齢期の子供たちが体験活動の楽しさを感じるとともに、集団行動や人との関わり方のルール等に気付く。

### (3) 参加者

年長児17名・小学1年生12名・2年生11名 計40名  
保護者（第1回トークセッション 34名、第2回講演会 37名）



## 2 活動内容

<第1回 平成30年9月2日(日) 会場：国立能登青少年交流の家>

9:30	10:00	12:20	13:45	16:00
受付(能登)	はじまりの会	＜子供＞アイスブレイク・フードハントゲーム ＜保護者＞トークセッション 講師 南加賀保健福祉センター 所長 沼田 直子 氏 「親と子の響きあい～折れない心を育む～」	昼食 子供と保護者は別々に食べる	「ホットケーキ作り」 子供は保護者のために、保護者は子供のために作る
				おわりの会

<第2回 平成30年9月8日(土)～9日(日) 会場：国立能登青少年交流の家、石川県立鹿島少年自然の家>

1日目	能登					
	13:30	14:00	16:30	17:30	19:00	20:30
	受付(能登)	はじまりの会	砂像造り	テント設営	夕食	読み聞かせ、入浴
						テント泊

2日目	能登		鹿島			能登	
	6:00	7:20	9:00	10:15	12:00	13:00	15:00
	テント片付け	朝のミッション	朝食	鹿島へ移動	鹿島の森探検	昼食	＜子供＞アップルパイづくり 能登へ移動
							＜保護者＞講演会(能登) 講師 国立青少年教育振興機構 理事長 鈴木 みゆき 氏 「早寝早起き朝ごはん～賢く、元気に、機嫌よく！～」
							おわりの会

## 3 幼児期における自然体験活動の展開のポイント

### (1) ねらいを明確にした評価

3つのかかわる力「自分とのかかわり」「他者とのかかわり」「社会とのかかわり」を意図的・計画的にプログラムに仕込む。子供たちの具体的な姿を想定しておくことで、ねらいを共有でき、効果的な指導につながる。

#### プログラムの中での具体的な子供の姿

場面	自分の力でやりとげる(自立心)	仲間と協力する(協同性)	きまりを守る(道徳性・規範意識)
はじまりの会 おわりの会			静かに話をきくことができる
アイスブレイク			きまりを守って楽しく遊ぶことができる
フードハントゲーム		仲間といっしょに行動することができる	
ホットケーキづくり	自分で料理することができる。(かき混ぜる、焼く等)		
砂像造り	自分がイメージするものを作ることができる	共同製作において、助け合ったり、教え合ったりすることができる	
テント設営 片付け	自分の役割を果たし、テントを作ることができる	仲間と協力して準備や片付けをすることができる	
読み聞かせ		集中して絵本を読む(聞く)ことができる	
朝のミッション		仲間と話し合いながら、協力して行動することができる	
鹿島の森探検		仲間と協力して自然物を集めたり、それを使って遊んだりすることができる	
アップルパイづくり	じぶんで料理することができる		
ベッドメイキング		仲間といっしょに行動することができる	
食事	好き嫌いせずに食べることができる		マナーを守って、箸やスプーンを上手に使うことができる
お風呂	自分で着替えたり、体を洗ったりすることができる		
就寝		一人で静かに寝ることができる	
トイレ		一人でトイレに行くことができる	

「みんなで、何をつくるか考えよう」  
「どこを削るといいのかな」(スタッフ)

「こを丸くしてね」  
「この道具で削るといいよ」(子供)



<砂像造り>

「4人でテントのはじを持ってね」  
(スタッフ)

「持ち上げるよ、せーの」(子供)



<テント設営>

### (2) 子供の成長の証に見える化

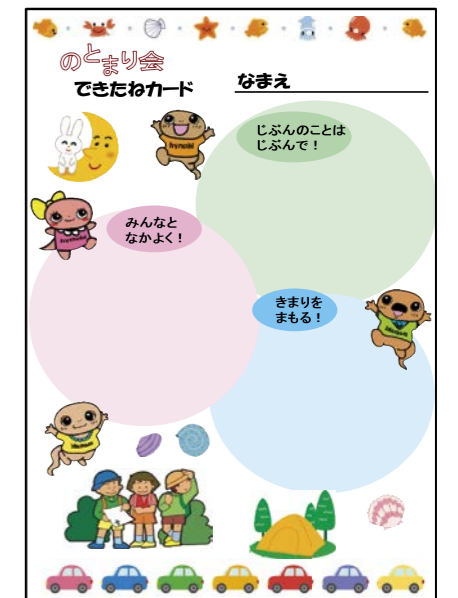
子供たちが成長を実感しながら意欲的に活動に取り組むことができるよう、「できたねカード」を取り入れる。



<できたねカードへのシール貼り>

「お風呂はどうだった？」  
(スタッフ)

「一人で頭を洗えたよ」  
「パジャマも一人で着たよ」(子供)



4 評価・考察

<子供の絵日記の見取り>

年長児や小学1・2年生が活動の振り返りを自分の文章で書くことは、難しい面がある。そこで活動を通して一番楽しかったことを、絵日記で表現することにした。小学1・2年生には絵の説明を簡単な文章に書く欄を設けた。

< M児 第1回の絵日記 >



自分(M児)と手をつなぐS児が書かれている



<フードハントゲーム>

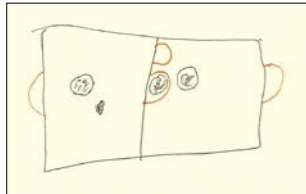
< S児 第1回の絵日記 >



リーダー  
の思ひは、フード  
ハントゲームで  
みんなと仲良く  
できたこと  
です。

リーダー(ボランティアスタッフ)と班の全員が書かれている

< N児 第1回の絵日記 >



あんな  
ホットケー  
き作りして  
たのしかった  
けんかをしな  
くてもよか  
った。

「けんかをしなくてとてもよかった」…他の人とのかかわりに着目

< N児 第2回の絵日記 >



あんな  
テン  
ツクリお  
もい  
た。

「もくひょうをたっせいできた」…昨年からの成長の自覚

事例1 M児(保育園児)とS児(小学2年)の関係性 フードハントゲームの様子より

M児の絵日記には自分以外に、リーダー格のS児が描かれている。S児は誰に対しても優しく接することができ、また、みんなにいろいろなことを教えてくれる頼もしい存在である。M児はそんなS児の存在を一目置き、憧れの存在として絵日記に記したものと考えられる。

S児の作文には、「一番の思い出はフードハントゲームでみんなと仲良くできたことです」と記されていた。S児はチームの仲間と楽しく活動したいと願っている。チームの中でトラブルがあった時も絶えず笑顔で声をかけ、間違っていることは間違いであると教えるなど、きまりを守ることの大切さを仲間伝えることができた。

M児は、S児に支えられながら、安心してチームの中で活動できているのだと推察される。

事例2 昨年に引き続き、のとまり会に参加したN児(小学2年)の成長

第1回のN児の絵日記では、「けんかをしなくてよかった」と記されていることから、他の人とのかかわりに着目している。N児は小学2年生の上級生としての立場、昨年も経験しているという自信をもって、自分たちのチームの仲間と仲良く過ごしたいという気持ちが推察される。実際に、積極的にチームの保育園児と手をつないで誘導したり、分からないことを教えてあげたりする姿が見られた。

第2回の絵日記では、「目標を達成できた」と記されていた。昨年は一人で泊まることに不安を感じ、「帰りたい」と言って泣き、スタッフが寄り添って寝たという出来事があった。今年は、N児の口から「帰りたい」という言葉はなかった。テント泊の時間になっても、泣き出すこともなく友達と話をしながら一夜を過ごすことができた。「テントで友達と寝る」ことを目標に決め、強い気持ちでのとまり会に参加したこと、そして、目標が達成できたことの充実感がこの日記から伺える。

のとまり会を通して、N児は自分の力でやり遂げる力(自立心)、仲間と協力する力(協調性)が高まったと考える。

<ボランティアスタッフのアンケートによる見取り>

1 グループ子供6~7人に2名の班付きボランティアスタッフを配置した。2回連続で参加したボランティアが数名おり、子供の姿を見取るためには有効であった。2年生を中心に班がまとまっていくとともに、個々の成長、「できたねカード」の有効性が伺える。

<ボランティアスタッフのアンケート自由記述より(1回目)>

- ・ホットケーキ作りで、子供たちだけで分担を決めて、小学2年の子供が中心に頑張っていた。
- ・チームがバラバラになっている時に、男の子が「みんなでまとまって行こうよ」と叫ぶと、みんながまとまっていた。

<ボランティアスタッフのアンケート自由記述より(2回目)>

- ・2年生の女子が、自分のやりたい気持ちを抑えて「私は最後でいいよ」と言ってくれたことが嬉しかった。
- ・できたねシールはやっていくうちに、子供たちから「〇〇できたから、〇〇にシールはって」と言うようになった。

<保護者の事前事後アンケート>

第1回終了時と、事業終了後約1か月後に保護者へ家庭での様子についてのアンケートを実施した。1・2回目両方に参加し、回答があった保護者を分析対象として、1要因2水準の分散分析を行った。

項目は、高めたい3つの力「自分とのかかわり」「他者とのかかわり」「社会とのかかわり」から、それぞれ2項目、計6項目とした。

表1は、各調査時期による平均、標準偏差、分散分析の結果を示したものである。分析の結果、事業前後において、5%水準で有意差が見られた。また、他者とのかかわりでは、1%水準で、社会とのかかわりでは5%水準で有意であった。

また、事後アンケートでは、子供の変化について自由記述欄を設けた。家庭や学校生活における変化があった。未就学児は、主に自分のできるが増え、年齢が進むにつれ、集団で生活する面での成長が見られた。

以上のことから、事業での「高めたい3つの力」が事業1か月後において高まっていることが分かった。

	観点項目
自分とのかかわり	自分のことは自分で言い、自分でできないことは助けを借りて自分で行うことができるか。 いろいろな活動や遊びにおいて、自分の力で最後までやりとげ、満足感や達成感をもつことができるか。
他者とのかかわり	相手にわかるように伝えたり、相手の気持ちを察して自分の思いの出し方を考えたり、我慢したり、気持ちを切り替えたりしながら、行動することができるか。 みんなで共通の目的をもって話し合ったり、役割を分担したりして、実現に向けて力を発揮しやり遂げることができるか。
社会とのかかわり	相手も自分も気持ちよく過ごすために、してよいことと悪いこととの区別などを考えて行動することができるか。 みんなと心地よく過ごしたり、より遊びを楽しむためのきまりがあることが分かり、守ろうとすることができるか。

表1 キャンプ前後の高めたい力の比較

	事業前		事業後		t
	M(平均)	SD(標準偏差)	M	SD	
①自分とのかかわり	8.16	1.25	8.28	1.43	0.19
②他者とのかかわり	6.76	1.82	7.76	1.50	8.11 **
③社会とのかかわり	7.64	1.49	8.24	1.42	4.50 *
合計	22.56	4.13	24.28	3.73	5.20 *

\*p<.05 \*\*p<.01

<保護者事後アンケート一部抜粋>

未就学児保護者

- ・「お風呂に1人で入れる!」「1人で寝れる!」と得意げに言い、家で自分のことは自分でできるようになった。親がついていけないほどの成長にとっても頼もしく嬉しかった。
- ・保育園で、お茶をこぼして泣いていたが、自分で気持ちを切り替えて泣き止むことができた。

1年生児童保護者

- ・親にべったりだったのが、親から離れ、他のお友達との関わりをもつことで、人に合わせたり、我慢したりするようになった。
- ・朝起きてすぐに何か勉強するようになった。

2年生児童保護者

- ・以前にも増して「きまり」を大切にしてくれるようになった。
- ・自分より年下の子に対して、より積極的にかかわるようになってきた。

まとめ



- 子供たちに身に付けさせたい力を明確にし、子供・スタッフ・ボランティアスタッフが共有したことで、活動プログラムが充実し、成長の変容の跡が多く見られた。
- かかわる力の3つの能力を意識して活動するために、できたねカードの利用は効果的だった。
- 事業1か月後の家庭や学校生活において、成長の様子が伺えたことから、本事業が個々の成長のきっかけとなったと考える。
- 2回目(1泊2日)は時間の余裕が少ないプログラムであった。子供たちのかかわりをより深めるためにプログラムの間に意図的に自由時間を持たせるなどの工夫が必要である。
- 経年参加する子供の見取りを意図的に行い、成長の様子を評価することで事業の有効性を検証していく。

# やんちゃキッズの大冒険 夏!!

## 1 事業の概要

### (1) 概要

当施設は1泊2日の幼児キャンプを12年間秋・冬に継続して実施してきているが、幼児期におけるより多くの体験・経験が子供たちの成長に関係していることは、さまざまな調査で実証されている。そこで、子供たちに「できる自分」「できた自分」をより多く増やしたいという願いから、夏に2泊以上の幼児キャンプを平成26年度より実施して5年目となる。このキャンプは、様々な生活体験や自然体験を通して、意欲的に物事に取り組む姿勢や人間関係能力を育むとともに、自然体験の大好きな子供に育てることを意識して行っている。

### (2) キャンプテーマと手立て

キャンプのテーマとして「自然の中で仲間と一緒に遊ぼう」「コミュニケーション」「自立」の3つを掲げ、プログラムの組み立てや手立て、子供たち同士、子供とリーダーの関わり方を考えて事業を進めていくことをスタッフ間で共有してキャンプを運営することを第一に考え取り組んだ。特に「コミュニケーション」の部分は、スタッフ・リーダーの言葉掛けや指示の仕方によって変わってくると思われる。そこで、事前研修では幼児の特徴やプログラム全体を考え、子供たちの言動・行動を予測して対応策を話し合う場を設けて一人一人がどのような『関わり方』ができるかの情報共有を行った。

### (3) 日程

平成30年7月7日(土)～8日(日)【1泊2日】 ボランティア研修  
平成30年8月4日(土)【日帰り】 事前保護者説明会  
平成30年8月23日(木)～25日(土)【2泊3日】 本キャンプ

### (4) 参加者

年長児 24名(男子12名、女子12名)【6名×4班】

### (5) スタッフ

立山青少年自然の家職員4名 学生ボランティアリーダー11名



## 2 キャンプの日程

### (1) 事前保護者説明会

8月4日(土)	参加幼児	はじまりの会 スタッフ紹介	グループで自由に遊ぶ
	参加幼児の保護者		自己紹介・活動エリア確認・自然遊具で遊ぶ 事業について説明・質疑応答 (ねらい・日程・持ち物・保険・提出書類)

#### ①事前説明会での様子

・子供たちは、初めて会った仲間の中で最初は緊張している様子だったが、一緒に遊んでいる中で徐々に笑顔も増えてきた。お互いに自己紹介をしてから遊び始めたが、まだ名前を呼び合う姿はなく、みんなで遊ぶというよりは、ボランティアリーダーが中心となって遊んでいることが多かった。しかし、はじまりの会で見た時の表情と、遊んで帰ってきた時の表情は違い、生き生きとしているように感じた。

### ②保護者からの意見

・子供だけの宿泊は心配だったが、説明会で詳しく内容聞き、一緒に活動する方々と会うことで安心してお任せすることができた。



### (2) キャンプ本番

	午前	午後	夜
8月23日(木) (1日目)	はじまりの会 班旗作り・テント設営	昼食 沢遊び 入浴	野外炊事 班タイム
8月24日(金) (2日目)	朝食作り ※動物探しゲーム(館内)	昼食・大丸山登山 宝箱探しゲーム 入浴	野外炊事 ※キャンドルファイヤー 班タイム
8月25日(土) (3日目)	朝食作り テント・荷物片づけ 自由遊び	昼食 おわりの会	

※台風による影響で一部活動を変更

### ～プログラムのポイント～

#### 【野外炊事】

キャンプでは、食事全てを野外でとった。その中で、子供たちは包丁を使って食材を切ったり、火を起こしてご飯を炊いたりして自分たちの食事をグループで協力して準備した。ボランティアリーダーの支援の中、子供たちに自分たちで「やってみる」ということを意識させ、「がんばってできた」という達成感につなげることができた。また、自然に子供たち同士の会話も増え、「一緒にやろうよ」とか「わたしこれやるね」という声も聞かれ、コミュニケーションが深まった。



## 3 キャンプに向けて(キャンプ中)の取り組み

### (1) キャンプの約束

キャンプ時に子供たちにキャンプの約束を話し、毎日の朝のついで意識を統一した。

①自分のことは自分でする ②お友達(仲間)と力を合わせる ③たくさん遊んで、たくさんお話しする

### (2) ボランティア研修

キャンプ本番1か月前にボランティア研修を実施し、活動を事前に体験するとともに、安全管理、子供への対応等共通理解を図った。

(内容) 活動体験(沢遊び・トントンの森)、グループワーク(行動予測と対策)、野外炊事

○ボランティア研修を終えて(アンケートから)

・活動体験で「子供を意識して」と呼びかけられたことで、子供と一緒に活動するときの状況をより細かく考えることができた。また、起こりそうな問題や解決策を話し合ったことで、子供と活動する上での視野が広がったと感じた。



### (3) 組織作り

キャンプを実施するために、スタッフ間の役割分担を明確にした。まず、キャンプ・プログラムディレクター、マネジメントディレクター、食事・装備・記録・保健の各係担当者を決め、キャンプの円滑化を図った。また一人一人が責任を持って臨むよう、5月末に準備を始めた後、月2回はスタッフによる進捗状況の確認を行い、全体で情報を共有するよう努めた。

その結果、事前の準備、計画に合わせたスタッフ・物品の動き、非常時の対応等、キャンプでは無理・無駄なく進めることができた。このことから、キャンプを実施する際は、スタッフ・ボランティアがバラバラに動くのではなく、1つのコミュニティとして組むことが、大切であると強く感じた。

#### (4) 共有意識

スタッフ・ボランティア間で「5つの意識」を全体で共有した。それらを意識して子供たちと接したり、リーダーとして統率する時に考えたりすることで、全体でのまとまりを期待した。また、その共有部分が子供たちとのキャンプの約束にも繋がってくることもあったので、特にボランティアリーダーへは繰り返し伝達して取り組んだ。また、夜ミーティングでは、ボランティアリーダー同士で話し合う場を設けた。自分が思っていること、感じたこと、明日から取り組みたいこと、その方法や改善策を話し合うことで、よりよく子供たちと関わろうとする意識に変化がみられた。2日目、3日目とリーダー間のコミュニケーションも良くなり、それが自信につながり、表情にも余裕が出たように感じた。また、1日目の班旗作りでは、子供たちでグループの目標を1つ決めて旗に書き、頑張ることをグループの子供たち、リーダーで共有した。



#### 『5つの意識』

- ①慌てない、焦らせない、「待つ」意識
- ②役割の明確化
- ③コミュニケーションを図るための手立て
- ④安全への意識
- ⑤時間の意識

## 4 評価

### (1) キャンプの約束との関連性(保護者アンケートから)

- ・「自分のことは自分で」と口癖のように言うようになった。何かをするとき失敗を心配することが多かったが、「失敗してもいいよね、やってみる」と挑戦することが増え、失敗しても泣かずに次に向かうようになった。
- ・今まで何をやるにも嫌がっていたり、言わないと動かなかったりしたが、キャンプ後は自分が言ったことに対して意識が強くなった様を感じる。約束したことを「しっかりやる」と思う気持ちが強くなった。



### 自立心

1人でできる  
失敗してもやってみる  
約束したことを守る



- ・玉ねぎ、じゃがいも、人参など皮をむいたり包丁で切ったり、食べたお皿を家族の分も片づけたり、食器を洗ったりしてくれます。
- ・ご飯の準備をしていると「何か手伝おうか」と言ってくれるようになった。買い物の時も「重い荷物も持てるよ」と積極的に持ってきて、キャンプの時に自分で荷物を持ったことが自信につながっているようです。



### 協力心

「お家でやってみたい」  
「お手伝いしたい」  
「僕にもできた」



- ・以前は、友達が遊んでいて参加したくても自分から「まぜてほしい」と言うことができなかったが、キャンプ後に、自分から話しかけて一緒に遊べるようになったことが一番驚き、嬉しく感じました。
- ・モヤモヤとした気持ちを表現できない時、今まではすねたり泣いたりしていたが、じっくりとそのことについて話合っ、悔しかった、悲しかったなど気持ちを言葉で表そうとするようになった。



### コミュニケーション

自分から話しかける  
気持ちを伝える  
相手の話を聞く



### (2) 子供たちの実際の姿(スタッフの観察から)

3日目の自由遊びの活動時、あるグループで豊かな想像性が見え、3日間意識してきた『コミュニケーション』からの変化であると感じた場面があった。グループ毎に遊びはさまざま、遊具で遊んだり、虫を捕まえたりとある程度こちらの予想していた遊びが広がっていた。しかし、あるグループは自然物を使って『レストランごっこ』が始まった。様子を見てみると、店員役・お客さん役・食事を作る役を子供たちがローテーションをしながら遊んでいた。レストランという『場』、キャンプ中の炊事の経験が、自然物で対応しながらの『ごっこ遊び』という遊びに発展したのではないかと感じた。指導者が決めて挑む活動もある中で、自由な時間を設けることから見えてくる子供の変化があることを感じさせられた。



### (3) キャンプ後の園・所での変化(幼稚園・保育所(園)の先生から)

- ・保育参観時に仲良しの友達2人で紙芝居を作り始めて、半分位できたところで他の子が「入れて」と声をかけてきた。あまり絵を描くことが得意ではない子に対して「お手本を見せるから、こんな風に描いてみて」とか「ちょっと位失敗しても大丈夫」と相手を見て話しをしている姿があった。
- ・運動会にて、本人が希望するものができなかったが、自分の担当になったことを頑張ると発言した。キャンプ前では、「自分がしたい」ということが強かったが、キャンプ後は「人に譲る」「他の友達を応援する」ということができるようになったと感じる。

### まとめ



- キャンプの約束として3つのことを掲げ、子供たちに伝え、朝の集まり時でも繰り返し確認をした。その効果として、初めはリーダーの声かけがあって動いていたが、2日目からはやらなければいけないことを自分で感じて取り掛かる姿勢が見られた。また、事後のアンケートにも、キャンプの約束を今でも覚えていて、実行しているという意見もあった。
- 「コミュニケーション」をテーマにして取り組んだ。コミュニケーションの始まりとして、名前で呼び相手の存在を理解することが大切であると考え、「お互いを名前で呼ぶ」ことを強調しボランティアリーダーに呼びかけた。時間が進むにつれ「〇〇くん、一緒にやろう」や「〇〇ちゃん、こっちで遊ぼう」などお互いを呼び合い、リーダー主導ではなく自発的な会話が生まれ、子供同士の関係作りができてきたと感じた。
- 幼児はまだ「できること」が少ない中で、「やらせてみる」ということが大切であると改めて感じた。その際、グループ支援をするボランティアリーダーのスキルや手立ての差で、子供の「できた」に違いが出てしまう。そのため、スタッフ・ボランティアリーダーの共有意識や言葉掛け、子供への対応能力を上げていく必要がある。より教育効果の高い幼児キャンプを目指す上でボランティアリーダーのレベルアップ・経験は必要不可欠である。

## 国立青少年教育施設中部・北陸ブロック次長プロジェクト

平成30年度 調査研究事業

## 「幼児期における自然体験活動の展開と効果に関する研究」



## 事業を終えて

私たち中部・北陸ブロックの5つの国立青少年教育施設は、青少年に質の高い体験活動の機会を提供し、自立した意欲あふれる青少年を育成することを目指し、各施設が海型・山型の立地条件やそれぞれの特色を生かした事業に日々取り組んでいます。

本プログラムの研究テーマは、「幼児期における自然体験活動の展開と効果に関する研究」として本年度が1年目の取組となります。幼児たちが豊かな自然環境の中で、仲間たちと一緒に、様々な体験活動を行うことは大きな意義があります。そして自然の中では、流れる沢水の冷たさや木々の匂い、冬はたくさん積もった雪の柔らかさなど、ホンモノの自然と触れることで子供たちの感性が育まれます。幼児期の体験はその人の成長の一生のベースになるのではないのでしょうか。

中部・北陸ブロックの各施設は、海や山、森など、豊かな自然の中で幼児の自然体験活動プログラムをたくさん展開しました。その成果が今後、全国各地の実践に活用され、新たなプログラム開発、そして更に幼児の体験活動が推進され、すべての青少年の自立の一助になることを心より願っております。

最後に、本プロジェクトの事業運営や評価、研究手法のアドバイスなど、継続的に親身にご指導を頂きました信州大学理事兼副学長 平野 吉直先生、筑波大学人間総合科学研究科教授 坂本 昭裕先生、信州大学教育学部講師 瀧 直也先生に心より感謝を申し上げます。

平成31年3月  
独立行政法人国立青少年教育振興機構  
中部・北陸ブロック次長プロジェクト事務局  
国立妙高青少年自然の家 次長 桑山 宗大



平成30年度調査研究事業 幼児期における自然体験活動の展開と効果に関する研究

■発行者/中部北陸ブロック次長プロジェクト

国立能登青少年交流の家・国立乗鞍青少年交流の家・国立立山青少年自然の家・国立若狭湾青少年自然の家・国立妙高青少年自然の家

■発行日/平成31年3月 ■印刷所/(株)第一印刷所

## 目的

幼児期における自然体験活動の効果的なプログラムや事業運営、子供たちとの関わり方や指導法など、幼児期にふさわしい自然体験活動プログラムのあり方について検証する。

さらに、その成果を全国の公立青少年教育施設及び国民に広く発信・普及する。

## 得ようとする成果

&lt;求める成果&gt;

- 幼児を対象とした体験活動プログラムや幼小接続を考えたプログラムの展開。
- 量的・質的效果検証方法を活用して、幼児期における効果的な自然体験活動プログラム開発

## 成果の普及・活用

本研究により検証した幼児期における自然体験活動の実際や子供の変容を報告書にまとめ、独立行政法人国立青少年教育振興機構 中部・北陸ブロック5施設の教育事業並びに研修支援に生かすとともに、全国の国立青少年教育施設及び青少年に関係した機関が活用できる幼児期の体験活動について、プログラムや手法について具体的に示し成果の普及と活用を図る。

## 研究機関

国立青少年教育施設中部・北陸ブロック次長プロジェクト  
国立能登青少年交流の家・国立乗鞍青少年交流の家  
国立若狭湾青少年自然の家・国立立山青少年自然の家  
国立妙高青少年自然の家（事務局）

## 研究期間

平成30年4月1日～平成31年3月31日

## 本調査研究事業の背景

(1) 国立青少年教育施設が実施する必要性

平成30年度からの幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（いずれも平成29年3月31日公示）の改訂（定）に伴い、幼児教育・保育において育みたい資質・能力の「3つの柱」と、幼児期の終わりまでに育ってほしい「10の姿」が示された。全年齢期の体験活動を標榜する当機構においては幼児期の体験活動の重要性に着目し、自然環境の特性を活かしたプログラム展開を実施している。今まで既に様々な場所で実践されている幼児の自然体験活動において、より効果的なプログラムと展開につながるよう成果をまとめプログラムや事業を実施し、広く成果を普及することは国の施策を具体化するナショナルセンターとして大切な役割の一つである。

(2) 長期的な計画と今年度の位置づけ

過去10年にわたり積み上げてきた成果の上に、今後3年の間、教育要領・指針等を踏まえ幼児期における効果的な体験活動のプログラム展開や効果に関して検証をしていく。今年

度は各施設が実施した事業を量的・質的に検証を行い、次年度事業へとつなげていく。

## 指導者

信州大学 理事・副学長	平野 吉直 先生
筑波大学 教授	坂本 昭裕 先生
信州大学 講師	瀧 直也 先生

## 担当者

国立能登青少年交流の家	
次長	松本 猛
主任企画指導専門職	布施 幸治
国立乗鞍青少年交流の家	
次長	山川 忠彦
企画指導専門職	北平 明美
国立立山青少年自然の家	
次長	岩間 一成
事業推進係主任	小泉 滋
国立若狭湾青少年自然の家	
次長	奥村 広一
企画指導専門職	大江 勝次
国立妙高青少年自然の家	
次長	桑山 宗大
企画指導専門職	福上 英彦

## 調査研究の計画

- (1) 第1回企画会議・研修会  
(研究テーマ・研究計画の検討)  
会場：国立妙高青少年自然の家 5月28日～29日  
○調査研究事業の計画検討  
○「幼児対象事業に関する講義・事例検討」  
講師：信州大学教育学部 講師 瀧 直也先生  
○「幼児対象事業に関する評価方法」  
講師：筑波大学人間総合科学研究科 教授 坂本 昭裕 先生
- (2) 第2回企画会議・研修会  
(対象事業の報告)  
会場：国立若狭湾青少年の家 10月29日～30日  
○各施設で実施した事業の概要と成果の報告  
○事業成果のまとめ方についての検討
- (3) 第3回企画会議・研修会  
(報告書の検討)  
会場：国立立山青少年自然の家 12月19～20日  
○各施設で開発したプログラムの成果と課題の確認  
○報告書の推敲と校正
- (4) 第4回企画会議・研修会  
(成果と課題の確認・次年度の計画)  
会場：国立乗鞍青少年交流の家 2月7日～8日  
○報告書の最終校正  
○平成31年度の事業企画及び全体計画の検討



### 国立若狭湾青少年自然の家

〒917-0198 福井県小浜市田島区大浜  
TEL.0770-54-3100 <https://wakasawan.niye.go.jp/>

若狭湾国定公園の中央にある田島半島の一角に位置する若狭湾青少年自然の家は、リアス式海岸特有の美しさが目に広がる専用ビーチを有し、ここでスノーケリングやカッターなどの海洋活動ができます。ここから漁村の人々との触れ合い、世界の国々へと海の道が続いています。



### 国立妙高青少年自然の家

〒949-2235 新潟県妙高市大字関山6323-2  
TEL.0255-82-4321 <https://myoko.niye.go.jp/>

妙高戸隠連山国立公園内の妙高山の山麓に位置する国立妙高青少年自然の家は、年間約13万人の利用者に大自然の中で質の高い人間関係能力を高めるプログラムや環境教育に対応したプログラムの提供を行っています。



### 国立乗鞍青少年交流の家

〒506-0815 岐阜県高山市岩井町913-13  
TEL.0577-31-1011 <https://norikura.niye.go.jp/>

乗鞍岳 (3,026m) の中腹、白樺林に囲まれた広大な飛騨乗鞍高原に位置する国立乗鞍青少年交流の家は、登山やスキー、高地トレーニングなど、標高1,510mを舞台とした自然体験活動や、青少年の社会性・コミュニケーション能力を育むプログラムの提供を行っています。



### 国立能登青少年交流の家

〒925-8530 石川県羽咋市柴垣町14-5-6  
TEL.0767-22-3121 <https://noto.niye.go.jp/>

能登半島の入口にあたる羽咋(はくい)市の、日本海を間近に臨み豊かな自然環境を持つ眉丈台地に位置する国立能登青少年交流の家は、青少年のステップアップ支援事業や里海、里山を活用した多彩な体験活動プログラムを提供しています。



### 国立立山青少年自然の家

〒930-1407 富山県中新川郡立山町芦峯寺字前谷1  
TEL.076-481-1321 <https://tateyama.niye.go.jp/>

立山連峰のふもと、不動平の丘陵地に位置する立山青少年自然の家は、より低年齢からの自然体験をモットーに、少年リーダー育成事業や小学校低学年・幼児を対象としたキャンプ事業、登山・星座学習といった研修支援プログラムの提供などを行っています。



体験の風を  
おこそう



National Institution For Youth Education

独立行政法人 国立青少年教育振興機構

#### ■中部・北陸ブロック

国立若狭湾青少年自然の家・国立妙高青少年自然の家・国立乗鞍青少年交流の家  
国立能登青少年交流の家・国立立山青少年自然の家